

思考力をのばすための国語指導

足利市立西小学校 佐藤行雄

はじめに

国語の指導において最低の要求といえば、「読み・書き」のできることもに育てることだといえよう。これは、こどもたちの両親が望んでいることでもあるのです。けれども、「読み・書き」ができることもであれば、物事を正しくみきわめ、深く考え、正しく判断することができるかといふ、それだけではできないのです。「聞く・話す」を加えた言語活動ができたとしてもだめなのではないか。このような言語活動が身についたということは、国語の基礎能力が身についたとはいっても、人間形成という教育の仕事がなし得たことにはなりません。そうはいつても、言語活動を身につけるための指導は大切な仕事なのです。また、根気のいる骨の折れる仕事なのです。国語の表記がすかしさから、「読み・書き」の指導にかなり多くの時間をかけなければならないという現実。これらの指導を通してこどもたちの考える力、ゆたかな心情等を育てたいという教師の願い。現実理想をどこで交叉させるかによつて、こどもの学習活動が規制されますから、日々の実践を反省し、よりよい指導のできる教師になりたいとだれもが研究を重ねているわけです。このことは、教科に限った問題ではなく、すべての指導に共通していえることでもあります。(交叉させるといふ場合は、縦軸を教師の願いとし、横軸をこどもの現実として考えた場合、その交点が学習活動の場となります。こどもの国語の基礎能力が高まれば、より高いところに交点ができるからです。) さて、描かれた人間像に向かつて、国語科ではどのような部門から近づけていくかということをしなりに考えていることを申しますと、こどもたちが注意深く読んだり、聞いたり、話したり、考えたりすることができるほかに、それらの学習を通して、論理的な思考力や、合理的な判断力をつけて、ゆたかな思想・感情を持つこどもに育てあげたいと願っています。また、注意深く見守るという態度や、慎重な行動がとれるようなこどもにしたいとも願っています。

訂指導要領には、国語科の目標が、簡潔なことばで表現されております。けれども、どのような実践を通してそれを達成するかという具体的な問題は勿論書かれておりません。また、書かれる性質のものではないでしょう。前に述べた交点は、わたしたちが生み出していくべきものだと考えましょう。わたしは、指導要領に示された基準が、(わたしなりに現実のこどもをふまえて実現する)とどれだけ達成できたかという点で反省していきたいと思つています。また、冒頭に述べた最低の要求のほかに、論理的な思考力等をつけていくにはどうしたらよいかという問題ととり組ん

でいきたいと考えています。

本 論

こどもの論理的な思考力や、合理的な判断力を伸ばすためには、そのような力をつけるための与える必要があると思うのです。国語科においては、国語の授業の中で、それがなされなければならないと思います。そのためには、素材としての教科書の文章が何よりも中核になってきます。すなわち、わたしたち教師が、教科書に出てくる文章をどう受けとめるかということから出発すると思うのです。いわゆる教材研究ですが、わたしたちは、教科書の文章を、分析的に研究し、そこで学習させる事項を明らかにし、どこに重点をおいて指導するかという問題をとらえた上で総論を、指導計画を立てなければならないと思うのです。

教科書に出てくる文章を大きく区別するならば、知的な文章（説明文・論説文等）、情的な文章（物語文・小説・童話・詩教材等）にわけられ、それに劇の脚本なども加えることができると思います。だが、このように大分類しても、一つ一つの文章の中にはそのいずれの要素も含まれておきますから、一概に、これは知的な文章だとか情的な文章だとかいう具合に区別できないのが常です。

そこで、わたしは、いかなる文章でも、その中のある部分は知的理解を必要とし、ある部分は情的理解を必要とするというように、指導の立場を明きらかにしてとりかかることが何よりも大切であろうと考えております。わたしがこれから述べようとする、論理的な思考力をつけようとする教材は、その知的理解を必要とする文章にあると申したいのです。前にも申した通り、説明文に限らず、物語文の中にもこのような要素はあると考えますので、××文というような分類方法をわたしはとりたくないのです。次に、論理的な思考力は、どのような指導をしたらよいかという点について明らかにしておきたいと思います。

1 文・文章の構造をばつきりとらえさせる。

文についていうならば、主語と述語の関係を明らかにし、修飾語がどうからみあつて出て来ているかというようなことです。このような学習は、重文・複文になりますと分析的に考えさせ、合して考えさせるということがあげられます。そして注意しなければならないことは、あまり分析的になりすぎたり、その文だけをとり出しすぎたりして、文と文との関係を忘れた指導は禁物だということなのです。

文章についていうならば、段落相互のかかりあいを考えさせるということでもあります。この場合文章全体を流れる主題という立場を忘れた指導であってはならないと思うのです。

ここで申しておきたい点は、論理的な思考力や合理的な判断力をのばすためには、文章の構造客観的にとらえ、何がどのように書かれているかを考えさせ、それによつてどんなことがわかる

成していくことから始める必要があるということなのです。

論理的な順序をふんで考えさせる

これは、主として教師自身の計画性という事が問題になってくると思います。子どもたちに論理的な思考力をつけるためには、教師も、その学習がしやすいような順序を計画すべきであると思うのです。すなわち、教材の展開方法において、また、発問（設問）においてその順序がやはり論理的に整えられていなければならないと考えます。（ここでは、教科書にでている文章が一応適切なものとして申したのですが、教科書の文章に、不適當なものでもあつた時には、扱う場合、子どもに用させてもよいと思うのです。すなわち、書かれている事実が真実なものであるかどうかといふことを実証しての上で……）

また、論理的な思考をさせる手がかりとなる語いに注意して指導するという方法も考えられると思います。このような方法は、あくまでも、何々のさせかたとしては必要なことですが、それを手がかりとして思索するという態度が子どもの身につけていかなければならないと思うのです。いわゆる親切型になつてはいけません。

なみに、させ方のいくつかの方法を述べておきましょう。

文中の接続及び段落の接続を考える場合においては、次のようなことばは、一応の手がかりになる。

ところで（論理の転換）

いったい（問題の提示）

ちょうど（抽象から具体的例証）

だから（前提に対する順当な結果）

ついに（結論）

もし（仮定）

さらに（補足・ふえん）

文中の指示することばがなにをさしているかを考えさせる。

これ・それ・あれ・この・その・あの・こんな・そんな

後文においては接続助詞に注意を与えて考えさせる。

…ので　・…から　・…ば　・…たり

…でも　・…けれど　・…のに　・…ながら

思考させる場合には間（マ）をおくことを忘れないようにしたい

私たちは、授業に熱がはいると、どうしても、その人のくせが出てくるものです。例えば早口だったり、問題を掲示してすぐその解答をあせつたり等々、ありがちです。

しいいつも、子どもたちに考えさせているのだという心構えで、ゆつくり納得のいく問いか

けと、間をおいてやるということが是非とも大切ではないでしょうか。音読する場合にしても同じです。開きとる練習をさせる時の話し方にはことさら間を必要とします。

4 事 例

<4年生の指導>

東書新編(Ⅱ)「発表」—みのむしについて—の学習をした後、ペーパーテストをしました。
☆ 次の文を読んで答えなさい。

みのむしの巣はともじょうぶにできているので、わたしは、どんなふうにするのか、知りたくなりました。そこで、一びきだけ、えだにぶら下がっている時の下の方を少し切ってみました。そしてあくる朝見ましたが、なんの変わつたこともありませんでした。中がからなのかと思つてのぞいてみると、ちやんと黒い虫がはいっています。寒いからかと思つて、こたつへ入れてあたためてやりましたが、変わりがありません。あまり動かすすぎるからかと思つて、こんどは一日ほうづおきました。やはり同じことでした。どうしたら巣を作るだろうかと、実験してきたことを考へているうちに、わたしはあることを思いつきました。それは、たぶん、切り口が反対だったのではないかということです。そこで、すぐ、こんどは別の一びきのぶら下がっている時の上の方を切ってみました。みのむしの頭はこちらの方にあるのです。しばらくすると、そのみのむしは、口を糸を出して、切り口をつくりはじめました。

- ㉑ ここで作者(この文を書いた人)は何を知りたいと思つたのですか。
㉒ そこで、2つの実験をやっていますが、そのことを次の表にまとめなさい。

	切つたところを — で示しなさい	みのむしの頭のある 方に○をつけなさい	切つてから中のみのむしは、 どんなことをしましたか
1 回目			
2 回目			

- ㉓ 文中のあることとは、どんなことですか。
㉔ えだにぶら下がっている時の下の方を切つて、作者はどんなことをしましたか。3つありまがやつた順になるべくみじかくまとめて書きなさい。

× × × ×

☆ 結果について(4年生284名についての集計)

- ㉑ の正答率 74 パーセント
㉒ の正答率
• 1回目の三つ共正答 29 パーセント
• 2回目の三つ共正答 49 パーセント

①・② 共正答 24 パーセント

③の正答率 73 パーセント

④の正答率

一つ書けた 11 パーセント

二つ書けた 32 パーセント

三つ書けた 29 パーセント

(正答率は小数第一位四捨五入)

この結果からわかることは、④主題を考える力、③指示することがらをつかむ力は、日頃の学習において指導しているので、よい結果が得られたといえます。⑤⑥については、授業では、このよきな発問によつて学習していませんので、注意深く読んで、その中から書かれていることを抜き出し、図に示したり、要約して答えたりする力がないと答えられないものです。つまり、④⑤の間どう反応したかによつて、こどもの論理的な思考力がみられると思うのです。結果から判断しますと、わたしの学校の4年生は、論理的な思考力をつけるために今後さらに指導しなければならないということなのです。

(注)④～⑥のすべて正答した児童は7パーセントで、いわゆるノーマルカーブの5の段階程度であつたことは興味ある結果でした。

わたしのクラスのこどもについては、男女別の正答率、⑤については一つ一つの箇所の正答率、切つたところ、頭のある方、みのむしの動きの3つについて、1回、2回の正答率を出し、こどもの知能偏差値と比較してみました。その結果

- ・男女の差は見られない。
 - ・知能偏差値とは相関度が高い。
 - ・こどもの生活態度と関係が深い。
- という三点を指摘することができます。

(生活態度は生活環境から生まれます。これは家庭での暮らし方という角度からもよい悪いの原因があるようです)

のはかくわしい点については、紙面の関係から省略させていただきます。

今後どのような指導をしていつたら、論理的な思考力がつか

—— 具体的な方策として ——

わたしたちの受持つている4年生の実態の一面を4において掲げておきましたが、更に思考力を育ていくためにはどうしたらよいかということが、わたしたちの当面の問題として残されたわけです。

家庭環境にめぐまれて、落ち着いて学習できる場を持つこどもは、テストの結果よい成績をあげ、社会的にも、家庭的にも学習の場が得られないこどもはよくないということは、必然的な結果として考えられないこともありませんが、それらを克服して力を少しでもつけたいというのが教師としての願いではないでしょうか。

そこでわたしは、次のようなことを考えたのです。

☆ 教師の教材選定に当る角度と、その重点的な指導方法

・わたしたちは、昨年の夏休みを利用して練習問題のプリントを用意しました。毎日ザラ紙半紙の国語・算数を一日にいずれかを交互に渡すようにしたのです。(夏の暑い最中に学校に出て、人して問題を考え、ガリ板印刷し学期が始まったら連日配布する段取りを实践しました。)一

の骨を折って作ったプリントすら家庭の関必がなく子供を野放しにしておくという家庭も可成りありますので、家庭訪問して何んとか最低の協力をさせていただく。5年生になつても実践し、練習問題を通してこどもたちに考えさせる学習の場を与えることが必要だと思います。

・教材の選定に関しては、思考力をのばすという観点から多角的に収集するということが必要だと思つています。例えば、説明や解説という分野をとりあげて例示いたしますと、

1. 定義的に説明する文
2. 比較して説明する文
3. 実例を示して説明する文
4. ある証明のしかたで証明する文
5. 統計や数字を使つて説明する文
6. 視覚にうつつたえて説明する図表やグラフ、及び図解のついた文
7. くりかえし説明する方法をとる文

等あらゆる種類の文章に今後指導のメスをいれたいと考えております。(今までに国語において半紙半切70枚を超える問題作成をいたしました。が紙面の都合で省略させていただきますが、この研究所が中心になつてこのような資料を活版印刷し、有料配布したとしたら、わたしたちの力の限界以上の仕事ができるのではないかと考えてもみます。それには、各学校の同一歩調ということも基底になりますが……)

☆ こどもの学習意欲を喚起するという角度から

何と言つても、こどもが、学習に興味を持たなくてはどうにもなりません。そこで、前にも申したことですが、教材研究を深め、発問方法を工夫したり、賞讃する方法を考えたり……あらゆる角度から手をつなぐことだと思つたのです。そして、学習意欲にもえたこどもを作りあげることが何よりも先決条件だと思つています

思考力をつけるということは、国語科に限られたことでなく、他教科にも共通していえることですから、このような学習意欲の醸成には、学校と家庭との緊密な連携が不可欠だと思つています。

☆ 授業ではどのような手をうつか

前にも述べました通り授業ではどのような手をうつかによつて、こどもの力が伸びるかどうかが定まると思つたのです。そして、授業から発展して、こどもがどれだけ自主的に学習するかとい

子どもの伸びを厚みのあるものにする要因になると思います。ここでは、根本的なことがらをおきたいと思います。

「読みの抵抗をできるだけ学習にはいる前に除去しておくこと。」—これは、プリントやグ
のリーダーの指導で出来ると思います。

「教材の中で問題となる文章をあらかじめきめて、授業ではそこにウエイトをかけること。」

これもがやっていることですが、これは、目標のすつきりした授業をする秘訣になると思うの

そして、子どもが考える場合、どのような手順で指導するかは、前に述べた教材選定の立

つて方法を考えるべきです。「みのむしについて」のところであれば、テストでその結果

というのでなく、あのような表を小黒板に書いておき(又はプリント)話しあいを活発に

なら、子どもの考えを深めることが必要だといえます。

さらに「練習教材を用意しておき、子どもの力で可能なものを家庭学習として課すこと」が必

要だと思います。—実は、このような素材を収集するのに大変なのですが、検定教科書の多

量なですから、心がければできると思います。結論的にいいますと、考え方(ヒント)を与え

る力を伸ばすと共に、その考え方も子どもの身につけさせることも大切だと思うのです。

しかしが今まで集めた資料を、分類整理して、機会がありましたら発表しようと思つていま

「子どもの個人差をどう処理するか」—これは、大へんむずかしい問題です。紙数がつきま

つて要点だけ記しておきます。授業中は、その子どもにあつた発問を与える。能力別のグル

ープ(優劣ははっきりしないように工夫)によつて異種の課題を与える。特におくれていること

を、せめて読み書きができるように配慮する。どの子どもも、成功感、満足感を味あわせる。

お わ り に

「みんな資料をのせて書こうと思つて用意して筆をとつたものの、わたし自身の考えている事も

ないという気持ちが手伝つて結局、脱稿となると、その後者が主となり、実践記録という名

のついたものになってしまいました。しかし、そのようなわたしの立場や考え方を通して実践

のつもりでありますので、資料のら列ということより、むしろ必要だというわたしの気持ちが

どうかを御賢察ください。

一言申したいことは、国語の指導は、はやく読み書きの抵抗をとりのぞいて、書かれて

味を、子どもと共に考えあい、味わいあい、意見をのべあい、そして、わたしだつたらこう

のような授業を展開したいと願つているということです。いろいろな角度から、子どもの

のばすための方法を、この文をきつかけとしてお教えいただければこの上ない幸せと思つ

たす。

講 評

「たくさん考えさせる学校がよい学校だ。」という意味のことがアメリカの教育書にも見えていますが、児童生徒に正確な論理的思考力と正しい判断力とを身につけさせることは学校教育の最も重要な仕事の一つでありましょう。

特にテレビジョンや漫画等のマスコミの影響が思考力を奪いつつあると心配されている今日においては、国語に限らずすべての教科を通して思考力をのばすことに重点をかけた教育が進められる必要があると考えられます。そしてそれがまた時代の要請であろうかとも考えられます。

そういう意味もあつて、最近では国語教育界においても「考える国語」ということがさかんに叫ばれて来ています。そういう折から、佐藤行雄先生のこのたびの「思考力をのばす国語指導」についての研究、実践は最も時宜に応じた適切な研究であるといえましょう。

さらに、この佐藤先生の研究実践は多くの資料を準備し、緊密な計画と適切な配慮によつて系統的に進められており、また国語教育の立場から、文および文章を通して論理的思考力を養うという態度をとられたのは適当でありましょう。そしてまた、文・文章の構造の分析からその具体的な方法をつかみ出そうと努力されているのは正統な行き方であります。

そういう観点から、この佐藤先生の実践記録は周到なりつばなのものであると考えられます。

ただ、これを読む場合、少し解説を加えて置かねばならないのは、佐藤先生のこの実践記録にあられたところだけ見ますと、文・文章を通してのみ思考力はのぼされるかのように解釈される恐れがあるということであります。

たしかにソーンダイクなども「推理としての読み」(Reading as reasoning)の中で「言語的な1節を読んで理解するということは数学の問題を解くことに似ている。」として推理思考のための文を重視しておりますが、大きく国語教育の立場からすると、言語活動全体の場において思考力をのばすということが絶えず、考えられていかねばならないのではないかと思われます。

たとえば「読む」という場合でいえば「語の意味を文脈に即して理解する。」とか「文の論理的関係(主語・述語・修飾語の関係)を正しく理解する。」等の思考力をのばすための内容をとりあげることができるが、「話す」という場合にも「筋道を立てて話す」というような内容を、「聞く」といふ場合には「要点を確実にとらえる」というような内容を、「書く」という場合には「文章を表現する場合の順序布置を考える」とか「文の論理的構成を正しくする」とかいうような内容を、それぞれ取りあげて思考力をのばすための指導を行うことができるわけであります。

即ち、「読み・書く」「聞く・話す」の言語活動のすべての分野において、思考力をのばす場

意図的に計画され、実践されなければならないわけでありませう。

しかし、この佐藤先生の実践記録はそういう一般的な問題をふまえた上で、「読み」の分野において文と文章を通してする思考力をのばすための指導方法をいつそう深く、いつそう具体的に追求したのであると見るべきものでありませう。

従ってそういう見地に立つてこれは読んでいただいた方がよいようであります。そして今後はさら「読み」以外の他の分野における場合の思考力をのばすための指導方法の実践記録なども生れて来るのではないかと考えられます。

(西中学校 大滝徳海)